

シンポジウム 10：施設看取り

演題名	小規模多機能型居宅介護における看取りについて
------------	------------------------

概要

高齢者総合ケアセンターこぶし園では、高齢者がそれまで生活してきた地域社会での暮らしを支えるために、24時間365日連続する訪問介護・訪問看護・通所介護・配食などとして、生活を支えるサービスを地域社会に点在させ、これらのサービスを包括的に提供するためのシステムとして「サポートセンター構想」を提唱し、サービス提供地域を限定した小規模多機能サービス拠点を構築している。

また2004年に内閣府に対して申請した構造改革特別区によりスタートした既存の特別養護老人ホームの地域分散は2006年の介護保険制度改革で地域密着型サービスになり、2014年3月をもって1982年に創設した定員100名の特別養護老人ホームこぶし園の定員は0になり、地域での暮らし移行が完結する。

これらの理由は、誰もがそれまで築いてきた人生のある地域社会の中で生活を継続したいと願っているからであり、これを支えるためには施設と同様の包括的なサービスの提供と施設利用者自身の地域復帰が不可欠だからである。そしてこのことは人生の最後を迎えるときにも同様である。

小規模多機能型居宅介護事業は、在宅生活を24時間365日連続的に支えるためのサービスとして創設され、費用負担もそれまでの在宅サービスの様な出来高負担ではなく、定額制のサービスであり在宅での看取りに重要な役割をもっている。しかし小規模多機能型居宅介護サービスも職員集団の単位は小さく、要介護高齢者と職員の距離が近いという利点があるものの、これに関わる職員の役割は幅広く全てをまかなわなくては成り立たない。つまり看護職員は看護だけを、介護職員は介護だけをといった役割分業では支えられないということで、看護職員であっても介護を、介護職員であっても看護の知識と対応が求められるということで、双方の理解と協力がなければならない。このためにはサービス事業者間及びサービス提供者間におけるチームケアが重要であり介護医療双方を併設した複合型サービスも創設された。

いずれにしても、要介護高齢者が在宅での生活を求める理由が、暮らしなれた地域社会から離れることなく、自分らしい人生を送ることにあるならば、そこでの看取りは必然であり、これを支えられる各種サービスと支援体制を整えることが私たちの使命である。